

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 草本 晶 会員数 約500人)

T E L 03-5950-1147

1 前 文

(本試験の評価書に同じ。)

試験のバランスを見るために、追・再試験問題は同年度の本試験と比較する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

大問の構成(大問1～7)、出題形式、総設問数(全51問)、配点とも、本試験と同じである。昨年度の試験に比べ、大問4で設問数が8から7になり、本文に合致する内容を2つ選択させる問題になった点も、今年度の本試験と同様である。

追・再試験で扱われた長文のテーマは、日本人留学生が友人たちとケルンのカーニバルを訪れる会話(大問4)、日本人女性(Ayumi)がドイツ人の友人やホームステイ先と交わすオンラインの会話やチャット(大問5)、結婚式の写真に写る不思議な男の物語(大問6)、音楽と脳の発達に関する科学的論考(大問7)であり、ジャンルも本試験とほぼ変わりなかった。

ドイツ語総語数(のべ語数)は2,065、総語彙数(単一語の初出回数)は640である。本試験は総語数2,231、総語彙数608であった。問題文全体のボリュームは本試験に比べ、200語近く少なくなっている。しかし、語彙数はやや増加した。さらに、試験問題の分量に関しては、本試験が24ページであるのに対し、追・再試験は26ページである。これは、第4問でページ数が本試験の6ページから5ページに減少したものの、第6問でイラストを使用した問題が設定されたことで、本試験の3ページから6ページに増えたことによる。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典(見出し語6～8万語程度)で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は8語であった(★)。

★ abseits, Blumenstrauß, daraufhin, erträglich, Erwerb, Süßigkeit, verschlimmern, zutiefst

本試験では難語と思われる語は13語であったことと比べると、追・再試験は難語が少なくなっている。これらの8語は、一般的な独和辞典において基礎語彙扱いではないが見出し語として挙げられている、一般的な語彙である。Blumenstraußに関しては、Blumeは基礎語彙であるが、Straußが重要度の下がる見出し語であるため、難語とした。上記に挙げた語のほかにも、共通テストで扱うには難しい語が散見されたが、受験者に配慮して本文中で注釈が付されていた。

これらを総合的に考えれば、全体的な問題の形式は、本試験とほぼ同程度であると評価できる。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 設問数(7)、ページ数(2)、配点(21)及び問題構成は本試験と同じである。発音に関する小問が3題、文法3題、語彙の分類に関するものが1題である。重要な基本事項の理解度を確認する上で総じて良く練られた問題である。

問1 母音の長短を問う問題である。選択肢4つの語はいずれも基本語彙であり、基本的な知

識を問う適切な問題であると評価できる。

問2 子音bの発音を問う問題である。本試験と比べても難度に差がなく、適切な出題である。

問3 名詞の語尾に形態素-ell, -al, -isch, -antがついて形容詞になったときに、強勢の位置が変わる名詞と変わらない名詞を分類する問題である。-ischがゲルマン語の接尾辞である一方で、-ell, -al, -antが外来語(ラテン語)由来の接尾辞であることを知っていれば分類できる。外来語由来の語を選択肢に使っているものの、難度は適切である。

問4 選択肢にある動詞の語幹に共通する短母音eのうち、3人称単数の主語の場合に母音交替を起こすものを選ばせる問題である。適切な問題であると言える。本試験と難度も変わらない。

問5 選択肢にある動詞の語幹全てに共通する母音iのうち、過去分詞にした場合に母音交替が生じるものを選ばせる問題である。正答のsingenが、その過去分詞も含めて基本語彙であるため、解答は容易かもしれない。

問6 名詞を複数形にしたときに、例と同じ語尾(-n)がつくものを選ばせる問題である。LöffelとOnkelは基礎語彙であるため、その複数形も含めてその知識を問うている点が評価できる。

問7 「曜日」「楽器」「職業」の3つのグループが示されている。選択肢はいずれも基本語彙であり、比較的平易な問題である。基本的語彙の知識を問う標準的な問題である。

第2問 設問数(8)、頁数(2)、配点(24)、出題形式のいずれも本試験と同様である。基本的な文法や語彙の知識を問うパートである。本試験と比較して、解きやすい問題が多い。

問1 動詞grüßenと結び付く、適切な所有冠詞を選択させる問題である。目的語を4格にする必要があることに気付けば、正解を選ぶことができる。出題のねらいも明確である。

問2 再帰動詞sich putzenの知識を必要とし、対象をduとする命令文であることに気付けば、正解を選ぶことができる良問である。

問3 適切な関係代名詞を選択させる問題である。先行詞Krawatteは基本語彙であり、関係文の中での関係代名詞の役割がschenkenの目的語であることに気付けば、正解を選ぶことができる。

問4 動詞bestehenと結び付く前置詞はausであることに気付けば、正解を選ぶことができる。

問5 sein+過去分詞で表される受動文の知識を問うている。基本的な知識を問う問題である。

問6 bleibenの過去分詞と結び付く適切な助動詞はseinであることを理解していれば、正解を選ぶことができる。基本的な知識を問う問題である。

問7 形容詞の語尾変化と比較変化の知識を問う問題である。正解は、不定冠詞ein、中性名詞Fußballspiel、さらに、文末にある比較の基準の表現alsと結び付くことに気付かなければならない。難度は高い。

問8 von *jm./etw.* Abschied nehmenの知識を問うている。日常的に使用頻度の高い表現の知識を問う良問である。

第3問 設問数(4)、頁数(2)、配点(20)及び、6つの選択肢から5つを選び空欄を補う出題形式は本試験と同様である。本試験では日常会話の表現が問われていたが、追・再試験では、パン屋での修行やビザ申請などドイツ語圏での生活を連想させる問いが目立った。

問1 まず「必要な」という日本語が、選択肢のnötigを使って表現するのか、既に文中にあるbrauchtなのかを判断する必要がある。その上で、brauchtが後置されていることを手掛かりに、alles = wasの構造に気付けるかがポイントとなる。同時に、bevorが導く副文中の語順が問われており、やや難度は高い。

問2 zu不定詞の位置、及びden Vertragとins Japanischeの語順が問われている。後者の点から

は、副詞句の語順を理解しておいてほしいという出題者の意図が読み取れる。

問3 die Stadtにかかる関係代名詞としてin derを選び、その後続く関係文を正しい語順で作れるかどうかを問う問題である。

問4 「お手伝いいたします」を*jm. helfen*ではなく、*jm. zur Verfügung stehen*の慣用表現で表すことに気付いた上で、さらに、副文に続く主文の語順にも注意を払う必要があり、難度が高い。

第4問 設問数(7)、配点(40)は本試験と変わらないが、頁数が本試験(6)に対して追・再試験では(5)となっている。これは問いに使用されているイラストが本試験2つに対して追・再試験では1つとなっていることもあるが、本文の行数と語数が、本試験ではそれぞれ55/447であるのに対し、追・再試験では51/359となっており、語数で約90語の減少が見られることにもよる。内容は、日本からベルリンに來ている留学生(Kenta)が帰国前にドイツ人の友人2人(AndreasとFabian)とケルンのカーニバルを訪れるというものである。大まかな設定は本試験と共通している。また、扱われているテーマも日本の祭り行事に通じるものであり、学習者にとってもなじみのある内容と言える。一部FaschingやUmzugという語が出てくるが、それらは直後にKarnevalやParadeという語で言い換えられており、解釈への配慮が感じられる。もっとも、Faschingという語が主に南ドイツで用いられること、また本文の舞台がベルリン、ケルン、ボンであることを考えると、なぜこの語を使用したのかということについてはやや疑問が残る(Andreasが南ドイツ出身であるという前提なのかもしれないが、そうであればもう少し本文の工夫が必要だったかもしれない)。その他幾つかの難語については適切に注釈が設けられている。先述の通り、本試験に比べて本文の語数が減少していることにもよるが、選択肢がドイツ語による設問も2題に減り(本試験は3題)、各設問もそれほど複雑な内容ではない。難度としては本試験より容易であり、その差がやや大きかったように思われる。

問1 選択肢を見なくとも前後の文脈からおおむね推測できるもので、容易に正解にたどり着ける。

問2 これも直前のKentaとAndreasのやり取りから正答が導き出せる。

問3 本文の旅程に関するAndreasの発言を丁寧に読めば正解にたどり着けるだろう。

問4 ここも前後のやり取りから④のkein Problemが正答であると比較的容易に判断できる。

ただし、①keine Ursacheと④kein Problemは、どちらもお礼に対する表現として使用されるため、正確に文脈を把握する必要がある。

問5 3人がパレードを見ている様子について、本文中の前置詞の解釈をイラストを用いて問う問題であり、良問である。

問6 本文からパレードが16時まで4時間続くことが理解できれば、逆算して正答にたどり着ける。幾つかの数字が混在してはいるが、丁寧に読み取れば問題ないだろう。思考力も問われる問題である。

問7 本試験と同様に、会話全体の内容に合うものを2つ選択する形式である。一連の会話を適切に理解すれば、正解が容易に導き出せる。

第5問 設問数(6)、配点(30)、頁数(5)は本試験と同じである。テキストは、東京にいるAyumiが、ワイマールにいる友人Ricardoとオンラインで対話する場面を扱っている。Ayumiが今後ワイマールでのドイツ語コースに参加する際に、現地でお世話になるホストマザーとのやり取りについてRicardoへ相談するという内容である。テキスト構成は、二人の会話文の間に、Ayumiとホストマザーのオンラインチャットのやり取りが含まれている。会話とアンケート調査の結果を示す図のみで成り立っていた本試験の構成と比較すると、追・再試験は昨年の追・

再試験に近い複合テキストになっている。また、本試験の場面設定ではドイツ語圏における日常が扱われていたことに対し、追・再試験では日本とドイツ語圏における、ことばと文化の違いが意識されている点は興味深い。追・再試験の会話テキストは24行、約190語、チャットテキストは18行、約120語の合計約310語であり、語数は本試験の約360語に比べると、やや控えめである。問題としては、日常的な表現の理解及び会話の内容を正確に把握する能力を試すものである。本試験と比べて、選択肢がドイツ語による設問も3題に減り（本試験は4題）、思考力を試すような設問もなく、受験者にとって解きやすかったのではないだろうか。

問1 Ayumiがワイマールに1か月滞在するという説明を受けた、Ricardoによる適切な返答を選択する問題である。会話の流れに対する理解を要するものである。

問2 ホストマザーによるAyumiに提供される部屋の説明を正確に理解する必要がある。住居に関するドイツ語の基本語彙のみならず、ドイツ語による階数の数え方の知識を問う良問である。選択肢が提示されている部屋の位置も分かりやすく描写されている。

問3 チャットの内容を正確に理解する必要がある。特にホストマザーによって発信された、Fischに関するチャットテキストのうち、「魚料理を提供したい」とは言及されていないことに気付く必要がある。

問4 下線部③の内容を正確に理解する必要がある。問題のsie kochen auch etwas Warmesが正解③に含まれているwarme Gerichteと類似し、④のsehr selten im Restaurantは会話文の内容と一致しないことに気付かなければならない。

問5 会話の流れを正確に理解し、Ricardoによる提案の表現が問われていることに気付く必要がある。36の後に触れられている、Ricardoによるホストマザーに対する肯定的な評価も理解できるかが鍵となる。

問6 会話テキストの内容全体を正確に理解しているか問うている。①、②、④の内容がAyumiとRicardoの会話で触れられていないことは、最初から最後まで会話文を読めば気付くことができる。

第6問 設問数(5)、配点(30)は本試験と同じだが、頁数は2倍の6頁となっている。これは、本文が本試験(約340語)に比べて約370語とやや長いこと、問2にイラストが含まれていることが影響しているためである。テキストは、フランツ・ホーラーの『写真』を元にした読み物で、写真に写り込む見知らぬ男の正体をめぐる怪談である。不規則な男の出現を正確に把握するとともに、この不気味な男に対する語り手の心情の移り変わりを読み取るかが問われている。本文中の語彙や表現は平易であるものの、本試験に比べて読む量が増え、登場人物も多いため、ストーリーの把握については難度がやや高めである。また、本試験では出題文中にテキストに関する簡単な説明(「次の文章は、記憶することにあるこだわりを持つ男の物語である。」)があったが、追・再試験では「次の物語を読み」と記されているのみであった。いわゆる怪談、怪奇小説は非日常的な現象を扱っているため筋を捉えにくく、受験者は正確にテキストを理解しているのか確証を得にくい。そのため、本試験と同じく出題文に説明を加える配慮があれば、スムーズに読むことができると思われる。その一方で、本試験にはなかったイラストが追・再試験では1つ加えられている。本文の内容が分かればイラストも理解できることから、その点ではテキスト理解の助けとなっている。

問1 6つの文章を話の順に並べ替える問題で、テキスト全体を正確に理解する力が問われている。本試験では本文中の語や表現が選択肢でも用いられていたが、追・再試験では本文中の内容が選択肢で言い換えられているため、本試験よりは難度が高めである。

問2 4つのイラストから適切なものを選ぶ。第1段落の最後の一文が正確に理解できれば、

正解を選ぶことは難しくない。なお、本試験ではイラストではなくドイツ語文から選ぶ形式となっている。

問3 男の不可思議な点について、4つの選択肢から選ぶ。男がどの写真には写り、どの写真には写っていないのかをテキスト前半から正確に読み取る必要があり、難度が高い。なお、本試験では日本語の選択肢が与えられていたが、追・再試験では選択肢がドイツ語になっている。

問4 男に対する語り手の心情を、4つの選択肢から選ぶ。最後の段落を丁寧に読めば不適切な選択肢を排除できるが、正答に対する確証も得にくいように思われるため、選択肢の工夫が必要である。

問5 テキスト全般を理解していれば、不適切な選択肢を比較的容易に消去することができる。

第7問 設問数(7)、頁数(4)、配点(35)はいずれも本試験と同じである。ただし、本試験と比べて、難度が著しく高い。文章のテーマ(題材)は、本試験ではミツバチを絶滅から守ろうとする少年のエピソードであったが、追・再試験では音楽が人に与える影響に関する科学的な論考である。音楽が素材であるため、その点では受験者にとっても身近なものであるかもしれないが、難語も多く、本試験とのバランスが悪いと言わざるを得ない。erträglich など、設問に答えるのに関係しない難語もあるが、選択肢に使われている geistig, verschlimmern, verbunden など、意味が分からないと解答できない、受験者(特に高校生)にはなじみが薄いだろう語も多い。Gehirn に注をつけるのであれば、Schwangerschaft や Klänge などにも注があっても良かったかもしれない。

問1 第1段落から出題されている。正答は、本文中の Erinnerungen wecken を, uns an Ereignisse in der Vergangenheit erinnern で置き換えている選択肢④である。正答となる選択肢にある erinnern が互いに対応する関連語(名詞形と動詞形)であることに気付けば、解答はできるかもしれない。ただし、総じて、選択肢を正しく理解するためには高度な語彙力が必要になる。

問2 第2段落から出題されている。本文中で keine zentrale Stelle, die die musikalische Klänge analysieren とあり、それと異口同音となる verschiedene Stellen im Gehirn analysieren diese Klänge を選べばよい。問題としては素直である。

問3 第3段落から出題されている。子供は、胎内でよく聴いた曲が記憶にあり、なじみのある曲として好む傾向にある、という実験結果について問われている。適切な出題と言える。

問4 第4段落から出題されている。音のハーモニーを感じ取る感覚が養われると、様々な種類の音楽を区別することができる、という内容に合うものを選ぶ。③がやや難しい印象があるが、正答である①の内容が読み取れば、解答は難しくはない。

問5 第5段落から出題されている。音楽の好みは、その人の生活スタイル、友達関係、周囲の環境によって左右される、という本文の内容を受け、正答は durch die Menschen, mit denen man eng verbunden ist (その人と密接な関係にある人たち)を選ぶが、「友達関係」が「密接な関係の人」で表し直されていると気づく必要があり、難度が高い。

問6 全体の内容と矛盾しない選択肢を1つ選ぶ問題である。②が正しいことに気付き、また、正答ではない選択肢を排除するためにテキスト全体の理解が問われているため良問であるが、語彙の意味を正確に理解しなければならず、解答に時間のかかったことが推測される。

問7 文章内容に合うタイトルを選ばせることで、テキストの大意の把握を試す問題である。解答は難しくない。

3 総評・まとめ

今年度の追・再試験は、問題の形式面では本試験と変わらないものであった。長文で扱われているテキストのジャンルも本試験とほぼ同じである。長文のテーマも、高校生・大学生に身近な場面やトピックが取り上げられており、受験者が取り組みやすい内容である。第5問の評価にあったように、ことばと文化の違いを取り上げたという点も興味深く、異文化理解を意識した出題内容になっている。また、高等学校でドイツ語学習を始めた受験者の学習の成果を適切に測れるような、基本的な問題も多く出題されている。問題の難度に関しては、全体的な語数の減少が見られ、本試験に比べ、難度が低めだと評価される問題もあった。その一方で、語数が減少すると、一語当たりの語彙力が問われることになるため、かえって語彙力が問われる問題もあった。今後は総語数が増えたとしても、受験者にはなじみの薄い概念などを一般的な表現に言い換えるなどの工夫があっても良い。全体としての難度は、基本的で解きやすい問題と、複雑で解きにくい問題の差が大きいように見受けられた。

全体的に追・再試験はおおむね妥当な問題であると言えよう。問題の難度は本試験と追・再試験で調整されているように思われるが、大問ごとの難度も本試験と追・再試験で調整できると良いのではないだろうか。今後も本試験の受験者、追・再試験の受験者、どちらにとっても著しい不利益とならないような作問の工夫を続けていただき、英語以外の外国語で共通テストを受験する学習者の外国語運用能力や思考力を幅広く問う出題を期待したい。